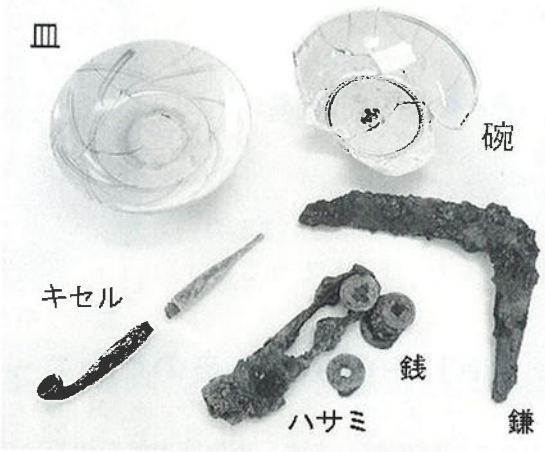
発掘現場から⑰

旅路（？）の必需品

～江戸時代のお墓から出土した遺物～



墓から出土した遺物

皿、碗、鎌がお供えされたもの。
他は副葬品。

発掘調査が終わりました

今年度の発掘調査は皆さんにご協力いただいて、11月いっぱいで無事終わらせることができました。現場での発掘が終わっても、まだ大事な仕事が残っています。それは調査の成果を発掘調査報告書という本にまとめて、公表することです。

現在、報告書を作るために、発掘のときに記録した図面や写真を整理したり、出土した遺物を詳しく調べたりしています。

お墓から出てくる遺物

門前第2遺跡では昨年度の調査で室町時代と江戸時代のお墓が約200基見つかりました。このうち江戸時代につくられた150基のお墓の中からは様々な遺物が見つかっています。この遺物を整理したところ、お墓にお供えされていたものや、お棺の中に入れられていたもの（副葬品）には決まったものが使われていたことが分かりました。

お供えされていたものには皿や碗など食器類のほか、鉄製の鎌がよく見られます。食器類は飲み物や食べ物をお供えするのに使っていたのでしょう。

一方の副葬品には時期的な変化があることが分かりました。まず、江戸時代の初期（17世紀）の墓には6枚の銭が入れられています。他の遺物はあまり出土しません。江戸時代の中ごろ以降（18・19世紀）になると副葬品の種類が多くなり、6枚の銭に加えて、キセル、ハサミ（和鋏）・毛抜き・鎌などの鉄製品が多くのお墓から出土しています。この組み合わせは大半のお墓で見られるので、おそらく決まった副葬品のセットだったのでしょう。

副葬品の意味

これらの副葬品にはそれぞれ意味があったと思います。ハサミなどの鉄の刃物類は魔よけの意味があったのではないでしょうか。お墓の上に供えられた鎌も同じ意味でしょう。6枚の銭は「六文銭」の意味だと思います。当時、三途の川の渡し賃には六文のお金が必要と考えていたようなので、死者がちゃんとあの世にいけるように路銀（旅費）を持たせてあげたのでしょう。また、キセルは当時の旅の必需品で、長旅の際の休憩には煙草が欠かせなかったようです。そのため、当時の人々は、あの世への長い旅路でも煙草休憩をするためのキセルが必要と考えたのだと思います。

「あの世」のはじまり

江戸時代中ごろに始まった路銀や旅道具を副葬するという風習は、死者があの世に旅立つと考える思想が庶民に定着したことを示しているといえます。このように、今私たちが想像する「三途の川」や「死出の旅路」といった死後の世界のイメージは、江戸時代に出来上がったものを受け継いでいるのです。

鳥取県埋蔵文化財センター
名和調査事務所
〒689-3205
西伯郡大山町西坪字中松堀179-5
電話　0859-54-2671